

高岡事件と中ソ関係 『季刊 共産主義と国際政治』 -1976.07-09  
第1巻第1号

「共産主義と国際政治」〔季刊〕第一巻・第一号／一九七六年七月―九月／通巻第一号

# 高岡事件と中ソ関係

中嶋 嶺雄

# 高岡事件と中ソ関係

中嶋 嶺雄

## 一 はじめに

アジアの冷戦は、第二次世界大戦終結前後のヤルタ体制の内部ですでに開始されていたといえるが、<sup>(1)</sup> やがて、中華人民共和国成立まもない時期の朝鮮戦争の勃発は、文字どおり冷戦の熱戦化をもたらし、北東アジアの国際環境を極限的に緊迫させた。そして朝鮮戦争は、表向き中ソの一枚岩的団結のもとでのアジアの東西対立を深く刻印したけれども、それとともに、すでに潜在的に萌芽していた中ソの対立関係を決定的なものにする一つの重要な歴史の土壌となった。<sup>(2)</sup> まさにこの同じ時期、中ソの歴史的な利害対立の磁場でもあった東北（旧満州）を舞台に生成したいわゆる高岡事件は、その全容がなおヴェールに閉ざされているとはいえず、これを当時の中ソ関係に投影してみたとき、そこには、きわめて重視すべき数多くの問題点が存在する。したがって、高岡事件は、中ソ対立の歴史的過程を遡及するにあたって、今日あらためて検

討を加えるべき重要課題だといえよう。もとより、本質的には中華人民共和国建国後最初の党内闘争であった高岡事件とその主要な舞台としての東北を中ソ関係史のなかに組み込んで再検討しようとする試みは、きわめて刺激的な作業ではあっても、さまざまな資料的制約のために、仮説の導入を前提としてのみ可能なものであろうが、幸いにして、最近発刊されたいくつかの重要な非公開文献や回想録など（毛沢東、フルシチョフ、王明などの）は、この試みを大きく補助するところとなっている。<sup>(3)</sup>

われわれは、高岡事件は、たんに東北を「独立王国」化しようとした高岡らの地方権力と、中国共産党中央権力との権力的角逐にとどまらず、中ソ対立の歴史的土壌としての東北を舞台にしたスターリンと毛沢東ないしは中国共産党中央との抗争の一環にも位置すべき国際的背景をもった重大事件ではなからうか、この仮説から出発し、以下、できるかぎり実証的にこの仮説を検証しようとするものである。

(1) このような前提については、さしあたり中嶋嶺雄報告「中ソ対立の歴史的構造——アジアの冷戦と中ソ関係（一九四八—五八年）」——「京都シンポジウム「アジアの冷戦構造」、一九七四年二月」、参照。

(2) この点について詳しくは、中嶋嶺雄「朝鮮戦争と中国」、『国際問題』一九七五年五月号、参照。

(3) 毛沢東の非公開文献としては、よく知られているように、文化大革命期に内部発行された『毛澤東思想萬歳』（同様の題名で編印されたものが四種類知られている）をはじめ、『毛主席対彭、黄、張、周反党集团的批判』、『毛主席文選』などがあり、いずれも『紅衛兵資料』として内部で学習用に編印されたものと思われるが、すでに多くの検討があるように、これらの資料は、十分に資料的価値を有するものだといえよう。フルシチョフの回想録は、ストロープ・タルボット編訳の長編が二度にわたってアメリカで刊行された（*Khrushchev Remembers the Years Khrushchev Remembers: The Last Testament*）、多くの話題をよんだ。この回想録については、編訳者およびエドワード・克蘭クショウの解説をまつまでもなく、少なくとも中国および中ソ関係にかんするかぎり、さまざまな資料批判（Text Critique）を経た結果、若干の記憶違いなどがあるにせよ、資料価値の高い、きわめてリアリティーに富んだ記録だと考えられる。一九七四年二月七日、ニューヨーク発11時事電によると、フルシチョフの回想録はフルシチョフ自身の口述テープに基づくもので、「テープの声紋がフルシチョフ自身のものであることが専門家によって証明された」という。王明の回想録（*Toussera KIKI IN Iperarushchero Mao Lia-lyna*）『中国共産党の半世紀』毛沢東の背信（*信*）など、中ソ対立下の今日、ソ連側が最近意欲的に刊行しはじめている諸資料にかんしても、それらが中ソ対立下の現時点で発刊されたものであることを計量して用いるならば、やはり重要な資料としての意味をもつことはいうまでもない。

## 二 高岡事件の今日的意味

一九五五年三月三十一日に中国共産党全国代表会議を通過した「高岡・饒漱石の反党連盟にかんする決議」は、高岡、饒漱石らの党首脳が党中央に叛逆し、東北地区を「独立王国たらしめようとした」その罪状を激しくあげきってきた。「彼らは、当面の階級闘争の特殊な環境のなかで、党内に生まれた、党と国家の指導権の篡奪を企図する、まったく無原則的な陰謀集団である」と非難して、いわゆる高岡事件（正しくは高岡・饒漱石事件というべきであるが、ここでは以下、高岡事件と略述する）の深刻な内面を暗示したのである。同時に、中央人民政府副主席として建国後の中国の最高指導層の一翼をになってきた高岡の「自殺」という衝撃的な「事実」が、「高岡は党にたいして頭を下げ罪を認めなかったばかりか、かえって自殺することによって党にたいする最後の叛逆の意志を表示した」という表現で公表され、内外に波紋を投じたのであった。このような高岡事件は、中華人民共和国における最初の党内闘争ないしは中共党史上最初に表出した肅清事件として記憶されてきたが、もとより、事件の全容はヴェールに包まれたまま数多くの謎を残してきたのであった。

だが、中ソ対立の隠された歴史的航跡が、われわれ自身のこれまでの検討によっても徐々に明らかになり、中ソ対立の真実に迫る多くの状況証拠や、いくつかの未公開資料が出現したことによ

って、事件の輪郭はしだいに明確になってきた。すなわち、高岡事件は、それが東北を舞台としていたこと、しかも毛沢東自身の言葉によっても、当時の東北は、新疆とともに、ソ連支配下の「二つの『植民地』」<sup>(2)</sup>であったことからして、党中央とは独自にスターリンと交渉をもっていた高岡と、スターリンないしはソ連の党・政府との特殊な関係が従来から注目されてはいたのであるが、最近にいたって、高岡事件の背景をなした中ソ関係とこの事件との関連を強く印象づけるいくつかの材料がはじめ、こうして高岡事件は、中ソ対立の現況からしても、きわめて今日的な意味を帯びて再検討を迫られるにいたったのである。

そこで、まず第一には、これまでのわれわれの研究からも明らかのように、東北がモンゴル、新疆などとともに、中ソの利害対立の磁場であり、勢力角逐の舞台であったことからして、東北というその舞台を「独立王国」化しようとした高岡事件も、背景としての東北をめぐる中ソ抗争という当時の国際環境と無関係ではありえないであろうという問題が設定できる。

第二には、今日の中国では、周知のとおり高岡、饒漱石らを「反党・反革命分子」として激しく糾弾しているが、ソ連やモンゴル人民共和国では、とくに最近、彼らを「国際主義者」として高く評価していることである。ここにも高岡事件の今日的な意味がある。

第三には、最近の毛沢東非公開文献やフルシチョフの回想録などによって、数多くの状況証拠に新たな照明が与えられ、事件の

背景と輪郭がより鮮明になったことである。たとえば毛沢東は、「スターリンは高岡を大変ほめあげて、わざわざ車を一台贈ったし、高岡は毎年かかさず『八・一五』にはスターリンに祝賀電報を打ったものだ」<sup>(4)</sup>などと語っており、フルシチョフは、「中国共産党内の雰囲気に関する情報の多くは、高岡からわれわれにもたらされた。当時彼は中共政治局の代表者であると同時に、満州の代表者であったが、満州で彼はわが代表たちと親密な関係にあった」<sup>(5)</sup>と回想している。

ところで、右のような背景をもつ高岡事件についての今日の国際的評価について、ここでふれておこう。

いうまでもなく中国共産党は、先の「高岡・饒漱石の反党連盟にかんする決議」以来、一貫して高岡、饒漱石らを激しく非難しており、この事件を建国後最初の「階級闘争」、「第一回目の大闘争」だと位置づけている。事件を討議した党全国代表会議（一九五五年三月）で「高岡・饒漱石の反党連盟にかんする報告」を行なうなど高岡事件の摘発と処理に主役を演じた鄧小平は、一九四五年の中国共産党七全大会以来一年ぶりに開かれた翌五六年九月の中国共産党八全大会の「党規約改正についての報告」で、「第七回大会から第八回大会までのあいだの、もっとも重大な党内闘争は高岡・饒漱石の反党同盟にたいする闘争でした」<sup>(6)</sup>と述べていたが、やがて、一九五九年に彭徳懐らが失脚すると、彭徳懐事件と高岡事件との関連が指摘され、ついで文化大革命以降は、高岡、彭徳懐、劉少奇らがつねに一線で結ばれて糾弾されるにい

たったのである。

一九五九年八月一六日付の中国共産党第八期八中全会「彭德懷を頭とする反党集団にかんする決議（摘要）」によると、彭德懷、黄克誠、張聞天、周小舟らいわゆる彭德懷グループの活動は、「高岡・饒漱石反党連盟事件の延長であり、發展である。現在すでに明らかにされたところによると、彭德懷と黄克誠ははやくから高岡と反党連盟を結び、しかも、この連盟の重要なメンバーであった。張聞天も高岡のセクト活動に参加していた」ということになっている。<sup>(8)</sup>

やがて、文化大革命が高揚しようとする直前に迎えた中国共産党創立四五周年記念の『人民日報』社説「毛沢東思想万歳」は、「建国後十六年来、毛沢東同志をはじめとする党中央のマルクス・レーニン主義的指導部は、反党修正主義グループと三回にわたる大きな闘争をすすめてきた。第一回目の大きな闘争は、高岡・饒漱石の反党連盟との闘争である。……毛沢東同志をはじめとする党中央は、これらの反革命分子と断固とした闘争をすすめた。一九五四年の党の七期中全会と一九五五年の党の代表者会議で、この反党連盟は徹底的に暴露され、粉碎された」と述べていた。<sup>(9)</sup>

一九六九年四月の中国共産党九全大会では、政治報告を行なった林彪が、「中国共産党の歴史は、ほかでもなく、毛主席のマルクス・レーニン主義路線と、党内の右翼と『左』翼の日和見主義路線との闘争の歴史である。毛主席の指導のもとに、わが党は、陳独秀の右翼日和見主義路線にうちかち、瞿秋白、李立三の『左』

翼日和見主義路線にうちかち、王明の、初めは『左』翼、後は右翼の日和見主義路線にうちかち、張国燾の赤軍を分裂させる路線にうちかち、彭德懷、高岡、饒漱石らの右翼日和見主義の反党連盟にうちかち、さらに長期にわたる闘争を経て、劉少奇の反革命修正主義路線を粉碎した」と強調した。<sup>(10)</sup>

ついで一九七一年七月の中国共産党創立五〇周年記念には、『人民日報』・『紅旗』・『解放軍報』三誌紙共同社説「中国共産党五〇周年を記念する」が、半世紀の党内闘争史を顧みながら、毛・林体制をたたえつつ、「社会主義革命は、資本主義を葬る闘争であり、全国の勤労人民から歡呼されたが、劉少奇一味の狂気じみた破壊をも受けた。彭德懷、高岡、饒漱石らは反党連盟を結んで中央を分裂させ、プロレタリア階級独裁をくつがえそうとした」として、劉少奇との関連を強調したのである。<sup>(11)</sup>

このような経緯ののちに一九七一年九月、林彪異変が生じたのであるが、林彪を徹底的に断罪した七三年八月の中国共産党一〇全大会では、政治報告を行なった周恩來が、「林彪反党集団」を激しく非難しつつ、「党内の二つの路線の闘争は長期にわたって存在し、これから先も十回、二十回、三十回と起るであろうし、林彪のような人物があらわれ、王明、劉少奇、彭德懷、高岡のような人物があらわれるであろう」と語ったのであった。<sup>(12)</sup>

以上のように、きわめて印象深い曲折を経ながらも、中国共産党内において、高岡らは一貫して激しく糾弾されてきたのであった。

一方、このような中国内部での評価にたいして、ソ連の側は、中ソ対立の激化とともに、高岡事件についても積極的に言及しはじめ、むしろ高岡の立場を大胆に擁護している。

ここでは、ソ連側の評価を端的に示していると思われるソ連の学者の見解をみてみよう。

中ソ関係史に詳しいオ・ベ・ポリソフは、「革命基地（満州を指す——引用者）の決定的戦闘への全面的準備を保証したソ連邦の意義と役割りは、インタナショナル派の共産黨員、とくに満州の党組織の黨員がこれをよく理解していた。このためにこそ、数多くのキャンペーンにおいて毛沢東とその一派は満州において党と戦闘の試練を経たインタナショナル派の共産黨員の大部分を弾圧したのである<sup>(13)</sup>」と述べ、明らかに高岡らを高く評価している。

ソ連科学アカデミー極東研究所のウェ・イ・グルーニンは、高岡事件についてしばしば論じているが、「毛沢東一派は、『高岡・饒漱石事件』のデッチ上げによって、党内のプロレタリア国際主義勢力の影響力を食い止め、党幹部を脅しつけ、それによって党の総路線を再検討し、毛一派『独特の』発展の道へ中国を向かわせるための政治的・組織的前提条件を準備しようとした<sup>(14)</sup>」と述べ、ポリソフ同様、高岡らを国際主義者として位置づけている。グルーニンはまた、「この事件は、毛沢東派が党内の健全な国際主義勢力に攻撃を加えた最初の大規模な政治行動であった」と述べ、高岡その人についても、「高岡は東北で献身的に活動していたソ連の政治、経済、軍事、技術の専門家たちと密接に協力した。高

岡は高い地位を保持しつつ、科学的社会主義建設のため、中ソ友好関係の強化のための積極的活動に直接参加した<sup>(15)</sup>」と追想して、先のフルシチョフの回想を裏づけるとともに、こうして高岡をたえて、中ソ関係史のなかでの高岡の位置を暗示しているのである。

中共中央からは反党分子として激しく非難される高岡を「国際主義者」だと評価する見方は、モンゴル人民共和国からも提起されている。内モンゴルを中国が自己の版図に加えて支配しているとするモンゴル人たちは、高岡がかつて一九四八年八月三日に内モンゴルの党活動にかんじて行なった演説「内モンゴル解放の道と党の民族政策<sup>(16)</sup>」にしばしば言及する。モンゴル側は、高岡がこの演説のなかで「内モンゴルの単一の自治政府の形成」にふれて、中国共産党主導型の内モンゴル統治とは異なった方向を示唆したものと評価し、こうした高岡の姿勢にもかかわらず、「しばらくすると、中国共産党内で支配的地位を占めるにいたった毛沢東らの小ブルジョアの民族主義派<sup>(17)</sup>」が、「真の国際主義者」としての高岡を打倒したとみなしている。

以上に見てきたような高岡らにたいするさまざまな評価を今日の中ソ関係に照らしてみたとき、高岡事件の今日的な意味はさらに明白に浮彫りされるといえよう。

(1) 中国共産党全国代表會議「關於高岡、饒漱石反黨聯盟的決議」

(二) 一九五五年三月三十一日通過、『人民日報』一九五五年四月五日。

(2) 毛沢東は一九五〇年初頭の中ソ友好同盟条約交渉に言及した際、「まだ二つの『植民地』すなわち東北と新疆が残っており、第三国人がそこに居住することは許されていなかったが、現在はなくなつた」と述べている。毛沢東「在成都会議上の講話」(一九五八年三月)、『毛澤東思想萬歳』(一九六九年八月)。邦訳、東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想萬歳』(上)、三一書房、一九七四年、二二三ページ。

(3) 前掲報告、「中ソ対立の歴史的構造——アジアの冷戦と中ソ関係(一九四八—五八年)——」、参照。

(4) 毛沢東、前掲「在成都会議上の講話」。邦訳、前掲書、二二二—二二三ページ。

(5) Strobe Talbott (transl. & ed.), *Khrushchev Remembers: The Last Testament*, Little, Brown & Co. 1974, p. 243. 邦訳、佐藤亮一訳『フルシチョフ最後の遺言』(上)、河出書房新社、一九七五年、二五五ページ。

(6) 邓小平「关于修改党的章程的报告」(一九五六年九月十六日在中国共产党第八次全国代表大会上)、『中国共产党章程——关于修改党的章程的报告』、北京、人民出版社、一九五六年、五五頁。邦訳、『中国共产党第八次全国代表大会文献集』第一卷、北京、外文出版社、一九五六年、二五四—二五五ページ。

(7) 「中国共产党八届八中全会关于彭德怀为首的反党集团的决议(摘要)」(一九五九年八月十六日)、『人民日报』一九六七年八月一日。このように、この決議の「摘要」(抜萃)が公表されたのは、決議から八年後の文化大革命高揚期においてであった。

(8) 彭徳懐らと高崗らとの結合が具体的にどのようなものであったのかは明白ではないが、文化大革命期にあらわれた紅衛兵資料によると、「抗美援朝の勝利後、裏切り者の彭は、『抗美援朝の功績は二人のあばたに帰せられる』、半分は高あばた(高崗)、半分は後勤の洪あばた(洪学智)だなどとデタラメをいった洪学智は彭徳懐事

件に連座して失脚した人民解放軍総後勤部部长で中共中央委員候補であった——引用者)。一九五一年、裏切り者の彭は、聶総参謀部長と総参謀部の工作に非常に不満で、彼は中央と主席が高崗を総参謀部で工作させるよううづてに要求した「清華大学井冈山山兵团」打倒大陰謀家、大野心家、大軍閥彭徳懐(彭徳懐材料彙編)』(八一九六七年一月)、丁望主編『中共文化大革命資料彙編』第三卷(八)彭徳懐問題專輯、香港、明報月刊社、一九六九年、所収)といわれている。

(9) 『人民日报』一九六六年七月一日。

(10) 林彪「在中国共产党第九次全国代表大会上的报告」(一九六六年四月一日報告、四月十四日通過)、『人民日报』一九六九年四月二八日。邦訳、『北京周報』一九六九年第一二二頁。

(11) 『人民日报』一九七一年七月一日。

(12) 周恩来「在中国共产党第十次全国代表大会上的报告」(一九七三年八月二十四日報告、八月二十八日通過)、『人民日报』一九七三年九月一日。邦訳、『中國共產党第十回全国代表大会文献集』、北京、外文出版社、一九七三年、一一—一二ページ。

(13) オ・ベ・ポリソフ「ソ連邦と中国革命の基地・満州」、『極東の諸問題』第五卷第一号(一九七六年三月)。

(14) ウェ・イ・グルーニン「中国共産党内の二つの路線闘争」、『極東の諸問題』三卷第四号(一九七四年一月)。

(15) ウェ・イ・グルーニン「高崗・饒漱石事件の真相」、『週刊中国事情研究』一九七四年三月一八日号。

(16) 高崗「内蒙解放道路和黨的民族政策——在内蒙幹部會議上的講話」(一九四八年八月三日)、『東北日報』一九四八年二月一日。『羣衆』第二卷第四八期。邦訳、日本國際問題研究所・中国部会編『新中国資料集成』第二卷、日本國際問題研究所、一九六四年、二五〇—二六三ページ。高崗は、この演説のなかで正確には「全国解放後においては、自由意志と民主主義の原則に基づいて、中国国

内の各民族により、『中華民主共和国連邦』（毛主席『連合政府論』）が組織される。内モンゴル自治政府はこの連邦の国境内部における主要な構成部分となるであろう」と述べ、毛沢東『連合政府論』の当時の見解を借りて連邦制のなかでの内モンゴル自治政府を位置づけていた。なお、高崗は、この演説でしばしばソ連と外モンゴルの内モンゴルにたいする支援に言及しているが、この演説は『高崗式の国際主義』の演説としても注目されたという。当時、スターリンとコミンフォルムがユーゴスラヴィアのチトーを民族主義者として激しく批判していたが、その批判はまた毛沢東にも向けられるべき性質のものであっただけに、内モンゴルにたいするソ連と外モンゴルの支援にしばしば言及し、あたかもソ連の影響下に内モンゴルが中国から離脱して外モンゴルと一様の道を歩むことを示唆したかのような『高崗式の国際主義』の立場が注目され、一時、有名な小冊子『国際主義と民族主義』のなかに加えられて、中国共産党員の必読文件の一つになった、とする見方もある（田豊「高、饒反黨聯盟始末」、史家麟編『中共高、饒事件面面觀』、香港、自由出版社、一九五五年、所収）。

(17) D・バザルガリド「大漢的排外主義と内蒙古の運命」、『極東の諸問題』第三巻第二号（一九七四年六月）。

### 三 「反党連盟」の摘発とその形成

高崗事件が摘発されたのは、公式には一九五四年二月の中国共産党七期中全会<sup>(1)</sup>後だとされている。七期中全会は、五四年二月六日から一〇日まで北京で開催されたが、この中央委員会総会は、「党の団結の問題」を主要な議題とし、「党中央政治局と毛沢東同志の委託を受けて」劉少奇が中央政治局の報告を行ない、

全会一致で「党の団結強化にかんする決議」を採択したのであった。同決議は「党内の一部の幹部は、……甚だしきは、自己の所管の地域や部署を個人の資産ないしは独立王国とみなしている」と指摘し、さらに、「故意に党の団結を破壊して党と対抗し、頑固に誤りを改めず、甚だしきは党内でセクト活動、分裂活動その他の危害活動をおこなうそれらの分子にたいしては、党は必ず無情な闘争をおこない、厳格な制裁を加え、場合によっては必要な時期に彼らを党から駆逐するであろう」と述べて、事態の深刻な側面を暗示したのである。この決議はもともと、毛沢東が五三年一二月二四日の党中央政治局会議で行なった「党の団結強化にかんする決議」のための「提案」に基づくものとされており、したがって、高崗、饒漱石らが行動の自由を失い、職務を停止されるなど実際上の摘発を受けたのは一九五四年初頭であったと推測されている。<sup>(4)</sup>つまり、一九五四年一月下旬から二月初旬の時期に高崗らは摘発され、事件は第二段階の粛清の過程へと進んでいったと思われ、四中全会の決議を経て翌五五年三月三一日に党全国代表会議で鄧小平の主導下に前記「高崗・饒漱石の反党連盟にかんする決議」が採択されて、高崗の「自殺」<sup>(5)</sup>を含むこの事件の処理が公表されるまで、約一年間の審理と猶余の期間をおき、党内の動揺を防ぎつつ、この事件は終結したのであった。

ところで、劉少奇が主導した右の四中全会に、毛沢東は欠席している。これらの点についての分析を含めて、ソ連側の見方には、やはり注目に値するものがあるといえよう。ウエ・イ・グルーニ



ンは、こう述べている。<sup>(6)</sup>

「一九五四年二月の四中全会は、毛の指示によって作製された劉少奇報告をもとにして、高崗と饒漱石は『敵の手先』となつて党内に『分裂と分派活動をもたらす多くの分派集団をつくりだそうと試みた』と断罪された。まもなくこの敵はソ連を意味していることがわかつた。毛一派は高崗を『ソヴェトの手先』と呼び、彼が党の『分裂』を策したと非難した。

四中全会では毛は手を出さず高崗の処理は劉少奇に委ねる態度をとつた。だが劉少奇は毛沢東が望んだような手荒な処置をとらず、四中全会はたんに『嚴重警告』を發したに過ぎなかつた。

一九五五年の中共全国代表會議では、『高崗事件』は中央委書記の鄧小平に委ねられた。彼はその任務を十分に果たした。高崗に政治的死刑を言い渡したのも彼であつた。このことは鄧のその後の政治経歴に重要な役割りを課した。やがて彼は中央委政治局員に互選され、その後一年少して中央委總書記に昇進した。『高崗事件』で果たした彼の功績が『文化大革命』後の免罪にも大きくものをいったと考えられる。」

以上の叙述は、高崗事件のリアリティーに迫る内容もち、この事件の概要を端的に物語っているように思われる。また、後述するように、本来は毛沢東と親密な関係にあつたと思われる高崗の摘発を当初は劉少奇に、のちには鄧小平に委ねざるをえなかつた。

た毛沢東の立場や、文化大革命以後、高崗事件との関連でも一貫した態度をとらなかつたとして、その「反党修正主義」を糾弾されることになつた劉少奇の四中全会での役割などについて、かなり的確に事態の核心を突いているように思われる。

ところで、高崗事件が摘発され、党の團結強化が唱えられた背景に、スターリン死後のソ連で摘発されたベリア事件の衝撃とその影響とが存在していたと思われることも見落とすべきではないであろう。すでにソ連国内で摘発されたベリアにたいしては、毛沢東が五三年一月二四日に党中央政治局會議で先の提案を行なつた同じ日に、モスクワの最高法院はベリアを正式に断罪したのであつた。

ここで、次に高崗および饒漱石の個人的な活動歴をみておこう。一八九二年に陝西省の横山に生まれた高崗は、一九二七年の国共分裂以後、陝西紅軍の最高指導者・劉志丹とともに陝西省北部で農民運動を始め、のちの紅軍主力の長征中は、はやくから陝西省北部にソヴェトを組織し、陝北の党と紅軍（紅二十六軍）の基礎をつくつたのであつた。こうして高崗は陝甘寧辺区を中心に呉起鎮や互響堡の根拠地を死守して長征後の紅軍を迎え入れることに大きな貢献をなした。一九三六年にモスクワへ赴き、四五年の中共七大で党中央委員に就任した高崗は抗日戦争後の国民党軍との内戦に際しても、党中央東北局および西北局の指導者として数多くの功績を残し、とくに東北（旧満州）の解放工作を指導して四九年には中共中央東北局第一書記、東北人民政府主席となつた。

た。中華人民共和国建国に際しては、六名の中央人民政府副主席のなかで朱徳、劉少奇とともに中国共産党を代表する三名の副主席の一人となり、まもなく党中央東北局第一書記、東北行政委員会主席、東北軍区司令兼政治委員と、東北の党、政、軍を一手に握ることとなり、中央では人民革命軍事委員会副主席なども兼務し、党中央政治局委員にも就任<sup>10</sup>、五二年一月からは国家計画委員会主席でもあったのである。このような高崗の当時の活躍は目を見張るばかりであって、『人民日報』はしばしば高崗の講話や活動ぶりを大きく報道していた。高崗の経歴のなかでは、彼が陝北を地盤にした土着派の共産主義者であり、陝北の党と紅軍（紅二十六軍）はもともと党中央にたいして、つねに自主独立的なしいは反中央的であったといわれ、「中央が派遣した幹部や代表との闘争を通じ、中央の指示や彼らの決定を拒むことを通じて、はじめて紅二十六軍は滅びることなく、『逃亡』と『流浪』のなかで強大になった<sup>11</sup>」といわれてきたことに注目すべきであろう。

饒漱石は、一九〇一年に江西省臨川に生まれ、上海大学卒業後、米、英、仏、ソ連に留学したインテリ黨員であった。帰国後、延安に入り、抗日戦争中は劉少奇のもとに華中局の宣伝部長、新四軍政治委員などを歴任したのち、戦後、東北人民解放軍政治委員を経て解放戦争では華東人民解放軍政治委員、上海解放に際しては陳毅が軍司令であった第三野戦軍政治委員をつとめ、建国後は党中央華東局第一書記兼華東行政委員会主席に就任、一九五二年八月、党中央組織部長を兼務することになった<sup>12</sup>。党の有力幹部

（党中央委員）であった。同時に、高崗主席のもとで国家計画委員会委員でもあり、以上の経歴にみられるように、とくに華東と東北に基盤をもつ指導者で、解放後の上海では「華東王」といわれたともいう。

さてここでは次に、「高崗・饒漱石の反党連盟」がどのようなプロセスを経て形成され、どのような目的をもっていたのかを検討しなければならぬ。われわれはまず中国共産党が発表した公式の罪状によってこの点を顧みてみよう。

「高崗・饒漱石の反党連盟にかんする決議」は、こう述べている。

「一九四九年以来、高崗は党と国家の指導権奪取を目的として陰謀活動を進めてきた。……東北地区を高崗の独立王国たらしめようとした。高崗が一九五三年中央のポストに移されて以後、彼の反党活動は一段と狂気じみたものになった。……極端にでたらめな一種の『理論』を鼓吹し、わが党は二つから成り、一つはいわゆる『根拠地と軍隊の党』で、もう一つはいわゆる『白区の党』であって、党は軍隊がつくったものであり、彼こそいわゆる『根拠地と軍隊の党』の代表者であり、かつ当然彼が主要な権力を掌握すべきだと自認し、かくて、党中央と政府はすべて彼の計画どおりに改組すべきであり、現時点においては彼自身が党中央の総書記あるいは副主席を担任し、かつ國務院総理を担任すべきであるというのである。……」

饒漱石は、高崗の反党陰謀活動の主要な同盟者である。……

饒漱石は一九四三年から一九五三年までの十年間に、何回も権力を奪取するため党内で恥ずべきでん手段を行使した。……一九五三年に彼が中央のポストに移されてから後には、高岡の中央権力奪取の活動が成功するであろうと考え、その結果、高岡と反党の連盟を形成し、中央組織部長のポストを利用して中央の指導的同志に反対することを目的とする闘争を發動し、党を分裂させる活動を積極的になすめた。……

敵は必然的に百方手をつくしてわが党を破壊しようとしており、最大の希望を中国共産党の分裂と墮落変質に托している。……高岡・饒漱石らの一派は、まさにこうした情勢のもとで反党連盟を結成し、党の中央委員会、まず第一に中央政治局に進攻をおこない、毛沢東同志を首領とする、長期の試練を経た党中央の指導中枢部を顛覆し、それを手がかりとして党と国家の指導権奪取を容易にしようとしたのである。……彼らの唯一の綱領は、陰謀的手段をもって党と国家の最高権力を奪取するということであつた。」

以上のような経緯は、中国共産党が公表した公式の罪状であるとはいえ、事件の輪郭をそれなりに実態的に伝えているように思われる。ただ、この場合、中国共産党全国代表会議の「高岡・饒漱石の反党連盟にかんする決議」はこうして公表されたけれども、「中国共産党中央委員会委員の鄧小平同志が中央委員会を代表し、高岡、饒漱石の反党連盟にかんする報告をおこなつた」とされているかんじんの鄧小平報告の内容は、今日にいたるまでいっさい

明らかにされていない。ここにも高岡事件の厚いヴェールが存在するが、解放前に上海の民主諸党派知識人として活動し、饒漱石の地盤である上海で陳毅市長(党中央華東局第二書記、第一書記は饒漱石であつた)を中心として事件の事後処理が行なわれたとき、陳毅が党上海市委員会小会議室で民主諸党派代表にたいして行なつた報告を聴取した向徳の手記に再現されている陳毅報告は、当時の状況からして、右の鄧小平報告の内容をかなり忠実に反映しているものと思われる。向徳が伝える陳毅報告によれば、高岡の第一の罪は、「以軍制党(軍をもって党を制する)」にあつたとされ、高岡は旧軍閥同様に「軍隊第一、地盤第一」ばかりを考え、「自分は軍人出身だ」といつも主張して、「軍は党に属する」という原則を大きく逸脱したことであつた。第二の罪は、「党を分裂させた」ことであり、毛主席を尊敬せず、自分がモスクワで少ばしかり学んだことのあるのを鼻にかけて、「自分は洋共だが、毛沢東などのグループは井崗山の土共だ」といって、党中央にたつたといふ。第三の罪は、「東北の特殊化と党中央の指導権の篡奪を企図した」ことであり、この点については、先の「決議」と同様のことが報告された。第四の罪は、「名誉を求めて大衆からひどく遊離した」ことであり、高岡の側近政治と大衆軽視が批判されている。第五の罪は、「私生活の腐敗と道徳的墮落」であり、とくに高岡の女性関係があげられて、「高岡の弁公室の何人かの女性秘書」は、やむなく「高岡の外室」にされていたことなどを陳毅は暴露している。

次に、饒漱石の第一の罪は、「職権の濫用と個人勢力の拡大」にあったとされ、いくつかの具体例が報告されている。第二の罪は、「敗北主義思想をばらまいた」ことであり、新四軍の政治委員当時以来、戦後の内戦、朝鮮戦争の時期を通じ、饒漱石がいかに蒋介石一味やアメリカ帝国主義を恐れていたかが批判された。

第三の罪は、「思想のブルジョア化」であり、自分自身が米国留学の体験をもつので、「アメリカ第一」の思想にとらわれ、すべてにブルジョア的で自分の娘はいまもパリにやっただままであることなども批判された。そして、饒漱石は、一九五三年に党中央組織部長になってから、党中央が提起した改造の機会をないがしろにし、逆にその地位を利用して高崗と反党連盟を結んだことが糾弾されたのであった。

以上の向徳の手記による陳毅報告は、のちの彭德懷事件の諸経緯<sup>(18)</sup>などに照らしてみても、かなりのリアリティーをもっており、したがって向徳の手記の信憑性は高いように思われ、先の「決議」とともに検討すれば、当時の状況をかなりの確に把握できよう。

「決議」の「敵は必然的に百方手をつくしてわが党を破壊しようとしており、最大の希望を中国共産党の分裂と墮落変質に托している」という表現が示す「敵」には、この場合、ソ連が含まれるのかどうかはさておいて、高崗が党の総書記あるいは副主席のポストとともに國務院総理の地位を要求したとの「決議」の説明<sup>(19)</sup>は一九七一年九月の林彪異変以後、林彪の「陰謀」だとされた問

題点と相共通する内容であることに気づかざるをえない。もとより高崗、饒漱石は、ともに中国共産党の首脳であったばかりか、「かつ中国二大工業地帯——東北および華東における最高指導者でもあった」<sup>(21)</sup>がゆえに、事態はきわめて深刻であった。

このように重要な意味をもった事件が摘発されてからは、四中全会諸文献の学習会議が各党中央地方局で行なわれ、五四年六月には六つの大行政区政府が廃止され、同時に党中央と同列の地方ビューローである党中央地方局も、その後数ヶ月間に順次廃止されて、地方分権化に終止符が打たれたのである。この過程で、上級幹部としては、張秀山（東北局第二書記兼秘書長、東北人民政府監察委员会主任）、張明遠（東北局第三書記、東北行政委員会副主席）、陳伯村（東北局組織部副部長兼東北人民政府監察委員会副主任）、郭峯（東北局組織部副部長兼東北人民政府人事部長）、趙德尊（東北局農村工作部長）、馬洪（東北局副秘書長、國家計画委員会委員）の六名が高崗の部下として、潘漢年（上海市党委第三書記兼第一副市长、向明（山東分局第一書記兼山東人民政府第一副主席）が饒漱石の部下としてそれぞれ追放された。さらにこの事件に連座した東北局、華東局の中下級幹部の数は枚挙にいとまがないともいわれている。

こうして高崗事件は処理されたが、高崗、饒漱石以下、これら一連の幹部にはば共通な特徴は、彼らがいわば土着的リーダーであり、毛沢東直系の党幹部ではなく、しかも長征に参加した幹部でもないことであったといえよう。<sup>(22)</sup>

- (1) 前掲「關於高崗、饒漱石反黨聯盟的決議」。
- (2) 「中國共產黨第七屆中央委員會第四次全體會議的公報」、《人民日報》一九五四年二月一八日。
- (3) 同右。
- (4) 高崗の公式な場面への最後の登場は、一九五四年一月二〇日に北京の懷仁堂で行なわれたレーニン逝去三〇周年記念大会であった。なお、このような四中全会とその前後の状況について詳しくは、許冠三『高饒反黨聯盟』原委」△下、『明報月刊』△香港▽一九六六年三月号、参照。
- (5) 謎の多い高崗の「自殺」にかんして、中国共産党は公式に「高崗は党にたいして頭を下げ罪を認めなかったばかりか、かえって自殺することによって党にたいする最後の反逆の意志を表示した」(前掲「高崗・饒漱石の反黨連盟にかんする決議」と発表している。この発表にたいしては、当然、さまざまな懷疑や推測を生んだが、なかでも王明は、高崗の「自殺」について、毛沢東が「彼を殺害した後、その『自殺』と党からの『除名』とが公告された」(Ган Мей, Омбика КИТК И Писемное письмо Мао Цзэ-Дуна, Государственное Издательство Литературы, Москва, 1975, стр. 195—196. 邦訳、高田爾郎・浅野雄三訳『王明回想録—中国共産党と毛沢東—』、経済往来社、一九七六年、二二五ページ)と見なし、またフルシチョフも、「高崗が自殺したことに、私は大きな疑問を持っている。私は恐らく彼を絞殺させたか、あるいは毒殺したと思われる」といつてこそ (Strobe Talbott, *Khrushchev Remembers: The Last Testament*, op. cit., p. 244. 邦訳、前掲書、二五六ページ)。一方、高崗・饒漱石の連の事件について、当時の上海で陳毅・党中央華東局第二書記(当時、上海市長を兼任)の報告を直接聴取した向徳は、その詳細な手記のなかで、党中央政治局の審問を頑固に拒否した高崗は、会議の席上、ピストルを取り出し、「同志各位がこうも私を信任しないのなら、皆さんの前で私は自殺してみせてやる」と

言い放って自殺しようとしたが、危うくわたらの政治局委員に阻止され、自殺未遂に終わった、との陳毅の報告を伝え、さらに、「党内から伝えられた消息によると、高崗は第一次自殺未遂ののち、一九五六年に再度の自殺をはかってついに死んだ、という」と述べている(向徳「饒漱石的『罪状』——高饒反黨同盟』真相」、『明報月刊』一九六七年五月号)。向徳の手記は、高崗の最後の死を一九五六年としている点で、中共中央の公表とも食い違っているが、高崗の「自殺」前後の状況をかなりリアルに描写しており、また、中国人の「自殺」が、しばしば強い抗議の意志表示であることからしても、やはり高崗は「殺害」されたのではなく、「自殺」したのではないかと推測しうる根拠が多いように思われる。

(6) 前掲、「高崗・饒漱石事件の真相」。

(7) 「ソヴェトの手先」という表現に関連して想起されるのはフルシチョフの次のような回想である。フルシチョフは、北京でのあるパーティーに言及してこう述べている。「そこに出席していた多数の若者たちは酒に酔って、わが代表たちに向かって着たの飼いの犬高崗」と怒りの言葉を吐きはじめた。このとき高崗はまだ中共の政治局の一員であったが、すでに危険な状態にあった」(Strobe Talbott, *Khrushchev Remembers: The Last Testament*, op. cit., p. 244. 邦訳、前掲書、二五四ページ)。なお、『フルシチョフ最後の遺言』は、ソ連では解禁されていないものであるのに、このようにソ連側の今日の見解と一致していることは、かえって、この回想録の信憑性とリアリティーを著しく高め、同時に資料的価値を高めるものだといえよう。

(8) 高崗の生年については、ほかに一八九一年、一九〇五年など諸説がある。

(9) 毛沢東はかつて、このような高崗の功績を高く評価し、『毛澤東選集』第三巻所収の「若干の歴史的な問題にかんする決議」に付された中共中央毛澤東選集出版委員会の註でも、朱理治、郭洪濤ら

の陝北根拠地の「左」翼的誤りにたいし、「正しい方針をとり、陝西省北部の紅軍と革命の根拠地をつくりだしていた劉志丹、高崗などの同志」がこれを克服したことを評価している。「關於若干歴史問題的決議」(一九四五年四月二十日)、『毛澤東選集』第三卷、北京、人民出版社、一九五三年、一〇〇〇頁。邦訳、三一書房版、第七卷、九三ページ。なお、この「若干の歴史的な問題にかんする決議」は、文化大革命以後の新しい『毛沢東選集』からは削除されてしまった。

(10) 高崗の党中央政治局委員就任は一般に一九五二年とされているが、一九五〇年六月の中共中央第七期三中全会から五三年一二月の中央政治局会議までのどの会議でその就任が決定したのか明らかではない。

(11) 許冠三『高饒反黨聯盟』原委』へ上、『明報月刊』へ香港へ一九六六年二月号。

(12) 一九〇五年に南昌に生まれたとの説もある(Cf. *Who's Who in Communist China*, Union Research Institute, Hong Kong, 1966)。

(13) *Who's Who in Communist China*, *ibid.* ただ一般には一九五三年から党中央組織部長に就任したとされており、詳細は明らかでない。

(14) 前掲「關於高崗、饒漱石反黨聯盟の決議」。

(15) 中國共產黨中央委員會「中國共產黨全國代表會議の公報」、『人民日報』一九五五年四月四日。邦訳、大久保泰「中國共產党史」へ下巻、原書房、一九七一年、六九〇—六九一ページ。

(16) なお、当時の上海市長は、南京、上海解放を指揮した第三野戦軍司令(政治委員は饒漱石)で、のちに中国外交部長として知られた陳毅であり、陳毅は党中央華東局第二書記兼上海市党委第一書記であったので、組織的には饒漱石の部下であり、饒漱石と同時に摘発された潘漢年(上海市党委第三書記)の上司の地位にあった。

(17) 向徳『高饒反黨同盟』真相』、『明報月刊』一九六七年四月号 および前掲「饒漱石の『罪状』——『高饒反黨同盟』真相」。

(18) 彭徳懐事件の諸資料にかんしては、さしあたり、丁望主編、前掲書、参照。

(19) 前述の向徳の手記による陳毅報告によれば、一九五四年八月、第一期全国人民代表大会が国家主席や國務院総理を選出するにあたって、党中央がとくに高崗の意見を求めたところ、高崗は、「自分はポストにたいして、どんな意見をもつ者でもない……。もしも党中央が私に相談するというのなら、率直にいおう。私は副主席兼國務院総理を担任するよう希望するのみである……」と答えたという(前掲『高饒反黨同盟』真相)。この経緯が正しいとすれば、一九五四年九月の中華人民共和國憲法公布に基づく新しい国家体制の形成にあたって、すでに同年二月の四中全会前後に問題が指摘されていた高崗らが右の人事についてこのような発言をしたことこそ、高崗らの摘発から粛清へと進んだ決定的な契機にされたのかもしれない。

(20) 林彪異変の問題点については、さしあたり、中嶋嶺雄『中国像の検証』所収「毛・林体制の解体——林彪異変」をめぐって——」および「林彪の死とその謎」、中央公論社、一九七二年、参照。

(21) ウェイ・イ・グルーニン、前掲「高崗・饒漱石事件の真相」。オ・ベ・ポリソフもこの点を同様に、「『高崗・饒漱石事件』の分析にさいし、注意をひきつけるのは彼ら二人とも中国における最大の工業地区——満州と華東(上海を含む)の党組織を指導していたことである」(前掲「ソ連邦と中国革命の基地、満州」と述べている。

(22) このような見方については、許冠三、前掲論文へ上、参照。

#### 四 事件の「真相」と性格

中国共産党の党内闘争は、いわゆる路線闘争としての性格を有

すると同時に、つねに党最高指導層内部の権力闘争としての側面を内在させている。高崗事件もその例外ではなからうが、この事件を指導者間の闘争としてみた場合、それをどのように描くべきかについては諸説が存在する。

そうしたなかで注目されるのは、当時、毛沢東主席に次ぐ政治的地位にあった劉少奇が、いずれにせよ高崗、饒漱石の直接的な抗争の対象であったとする見方がほぼ共通的に存在することであろう。この点は、前述の四中全会で劉少奇が主役をつとめ、その公式の「罪状」によると高崗は「党中央の総書記あるいは副主席を担任し、かつ國務院総理を担任すべきである」と主張したとされていることに示されるように、高崗がNO・2の地位を求めたらしいことから推測されるところであり、「党公表を額面どおりに解釈すれば、高崗がねらったものは、党内における劉少奇の地位、政府内における周恩来の地位であったということになる」といえよう。

このような前提のもとで、まず第一に顕著な見方は、高崗、饒漱石らと劉少奇および周恩来の対立とみるものであり、たとえば、事件摘発直後にいち早く分析を試みたピーター・タンは、高崗が「根拠地と軍隊の党」と「白区の党」を對抗させようとしたことに注目して、対象は毛沢東ではなく「白区の党」の代表者、すなわち劉少奇であり、周恩来もその対象になりえたとみなしている。

『風暴十年』の著者で、かつて中国民主同盟に属し、一九四六年八月から中華人民共和国建国直前の四九年八月まで最初の地方政

府として成立した東北行政委員会<sup>(4)</sup>の委員でもあった周鯨文も、劉少奇と周恩来が対象であったとして、こう述べている。「毛沢東が長征の末、尾羽打ちからし疲れきった七千余の紅軍をひきいて、延安にたどりついたとき、これを收容して生きのびさせたのが高崗である。彼こそ功臣であった。中共が天下を取ると毛沢東は彼を中央人民政府副主席兼東北人民政府主席に任じたのは、昔でいえば、まさに封侯拜相のたぐいであつた。だが高崗にしてみれば、党内では劉少奇に牽制され、行政では周恩来に牽制されていると感じた。……この闘争で、彼は『君側の奸を清める』と唱え、毛沢東反対を口にしなかつた。ねらうところは、劉少奇と周恩来だつたのである<sup>(5)</sup>」。この点は『中共の十大問題』の著者、金雄白もほぼ同意見であり、「高饒連盟の目的は、中共の指導権を奪い、劉少奇を攻撃するとともに、さらに周恩来に代つて國務院総理の地位を要求することだつた。その背後の支持者は、ソ連のスターリンであつた」と述べている。このような事情から、毛沢東の四中全会欠席について周鯨文は、「毛沢東は故意に故郷に帰り、そこで春節を送ると称して、傍観者の立場をよそおつた」とも語っている。毛沢東の四中全会欠席については、高崗が毛沢東ら長征の主力部隊を陝北で迎え入れてからの両者の「親密な戦友」としての関係を指摘する見方もあり、この意見は当然、劉少奇を事件の一方の主役とみなし、この事件を劉少奇の完全な勝利に帰した闘争だとみなしている。

この問題については、高崗事件にかんする力作を執筆した田豊

が鋭くうがった見方をしている。田豈によれば、「根拠地と軍隊の党」と「白区の党」という問題から、理論的には劉少奇と周恩来が対象になるが、毛沢東、劉少奇、周恩来、朱徳、高崗という当時の党中央書記処の五人の書記の第五位にあった高崗にとって、「周恩来は朱徳と同様にどうでもよい人物であり、真の闘争目標にはなりえず、目標は劉少奇であった」としながら、毛沢東も、表面上無関係をよそおい、他人にそのように思い込ませながら、実際には劉少奇を表面にだしつつ、この事件の摘発に関与していたのであり、その毛沢東が四中全会を休んだのは（当時は「休暇」と報せられた）、高崗事件の国際的背景を考慮し、「彼へ毛沢東——引用者V自身が国際的に衝突するのを避けるためであった」と推測している。四中全会の劉少奇報告が、前年一二月の中共中央政治局会議における毛沢東の「提案」に基づくものであったことを顧み、高崗事件の背景にあった中ソ関係を今日の時点で考えたと、この見方はきわめて説得力の強いものだとはいわねばならない。

さて、以上のような見方とそのヴァリエーションにたいして、第二の見方は、劉少奇および鄧小平との角逐に力点をおくものである。すでにみたように、高崗事件の処理過程と、その後の党内リーダーシップの推移からすれば、この見方もきわめて妥当であり、ソ連の見解を代表するウエ・イ・グルーニンもこのような見方である。グルーニンの場合は、すでに述べたように、この事件は、毛沢東が劉少奇に、そして最後的には鄧小平に手を下させた

事件だという基本前提にたっている<sup>(9)</sup>。さらに、高崗事件について詳細な論文を書いている許冠三も、鄧小平にたいする高崗や饒漱石の不満は、鄧小平が当時、憲法起草委員会、選挙法起草委員会、中央選挙委員会の三つの委員会委員を兼務し、實際上、中央選挙委員会の事務を主宰していたことであつたとして、抗日戦争や戦後の国内戦を通じ、鄧小平は高崗や饒漱石といつもいっしょだった人物だから、論功行賞でも鄧小平が彼らの上位につくべきではないと高崗らが考えていた旨を指摘している<sup>(10)</sup>。

ところで、当の毛沢東自身は、この事件にかんし、実際、どのような位置にあつたのであろうか。この点を知る材料は少ないが、毛沢東が高崗事件をどのように受けとめているかをみることによつて、ある程度の判断ができればよい。

非公開文献によると、毛沢東は、事件処理後の一九五六年四月、中央政治局拡大会議でこの事件に言及し、「四中全会は開くべきであつたし、決議は大変必要なことであつた。そうでなければ、高崗をもう一年のさばらせることになり、それは想像することもできないおそるべきことであつた<sup>(12)</sup>」と告白している。毛沢東にとって「想像することもできないおそるべきこと」が具体的に何を意味するのか、この告白だけでは明らかでないが、事件にたいする毛沢東の態度を十分に知ることができよう。やがて一九五八年三月の成都会議では、すでに引用したように、スターリンと高崗の親密な関係を例示し、「高崗・饒漱石事件は、震度八の地震<sup>(13)</sup>」だと語っている。そして、一九五九年八月の彭徳懐摘発に際し、毛



沢東は、「この党の主要な構成員が、もともと高崗の陰謀的な反党集団の重要メンバーであったことこそ、その証明の一つである<sup>(14)</sup>」と述べて、彭徳懷事件を高崗事件と結びつけるパターンを示したのであった。両者を結びつける共通項が「親ソ派」ということであらうことは疑いない。

ともかく、このようにみでると、高崗らにとって直接の対象は劉少奇、周恩來もしくは鄧小平であったにせよ、毛沢東にとって高崗摘発はすでに不可避の重要な課題になっていたように思われる<sup>(15)</sup>。

以上の諸状況を、今日の時点で再検討しつつ総合するならば、高崗事件は、党最高指導層のあいだの権力闘争としては、背景的には毛沢東を頂点とし、劉少奇、周恩來、鄧小平を擁する党中央の党官僚層と高崗ら地方に基盤をもってたてこもる指導者たちとの闘争であり、直接的には、劉少奇、鄧小平がこの闘争の前面にたつたのだといえよう。しかも、この権力闘争には、すでにみたように、高崗らの背後にスターリンとソ連共産党が存在するという国際的背景があった。同時に、この権力闘争は、東北と華東の二大工業地域をその舞台とした中央と地方との闘争であったという性格を帯び、「またその歴史的要因は、中共の伝統的な革命根拠地政策ないし地方ブロック政策と、政權確立後の中央集権化との不可避的な衝突にあったともいえよう<sup>(16)</sup>」。そしてとくに、この事件の主要な舞台が東北であったことは、この事件をきめて重大なものとし、かつ複雑化したのであった。もとより、ジョン・ギッ

チングスも述べているように、事件の「本当の理由」は、これらの諸側面のほか、「中央委内部における個人的なたみや個人的ライバル関係といった未知の要因を加えたところにあるのかもしれない<sup>(17)</sup>」。

ともかく、高崗事件は以上のような内容と性格を有していたのであるが、では次に、当時の東北を中心とした権力の地方化の問題を考えてみよう。

- (1) 前掲「關於高崗、饒漱石反黨聯盟的決議」。
- (2) 大久保泰、前掲書、六八九ページ。
- (c) Peter S. H. Tang, "Power Struggle in the Chinese CP: The Kao-Jao Purge", *Problems of Communism*, Nov.-Dec. 1955 (Vol. IV, No. 6).
- (4) 東北行政委員会(主席・林楓)は抗日戦争勝利後の一九四六年八月、中国共産党主導下にはじめて樹立された地方政府であり、四九年八月には東北人民政府(主席・高崗)へと発展した。やがて一九五三年二月の地方大行政区機構改革によって、ふたたび東北行政委員会(主席・高崗)が生まれ、高崗事件摘発後の一九五四年六月、地方大行政区の行政機構はついに廃止された。
- (5) 周鯨文『風暴十年』、池田篤紀訳、時事通信社、一九五九年、六三三ページ。
- (6) 金雄白『中共の十大問題』、本郷賀一訳、時事通信社、一九六三年、二四ページ。
- (7) 周鯨文、前掲書、六三三ページ。
- (8) 丁天立『中共黨争の真相——分析高崗、饒漱石「反黨聯盟」案』、前掲『中共高、饒事件面面觀』所収。なお、台湾の中共党史家・郭華倫は、陝北根拠地内部の積年の党内闘争に詳しく触れ、高

崗にたいする毛沢東のかつての高い評価に言及したのち、結局、高崗の「英雄主義」が「唯我独尊の毛沢東」と相容れなかった旨を強調している(郭華倫『中共史論』第三冊、台北、国際關係研究所、一九六九年、一二二頁)。

(9) 田豈「高、饒『反黨聯盟』始末」、前掲『中共高、饒事件面面觀』所収。

(10) 前掲「高崗・饒漱石事件の真相」。

(11) 許冠三、前掲論文(八下)。

(12) 「在中央政治局扩大會議上の講話」(一九五六年四月)、前掲『毛澤東思想萬歲』所収。邦訳、前掲書、六二ページ。

(13) 「在成都會議上の講話」(一九五八年三月)、同右所収。邦訳、同右、二二二ページ。

(14) 「二个批語」(一九五九年八月廿)、同右所収。邦訳、同右、四二〇ページ。

(15) その生涯を通じて一貫した親ソ派であり、ある意味で毛沢東のライヴァルでありつづけた王明は、高崗事件を次のような三つの目的が複雑にからみあった毛沢東の陰謀であったと強く主張している。第一の目的は、「劉少奇に代えて鄧小平を党中央委員総書記に選出すること」であり、毛沢東は羅榮桓、羅瑞卿らの側近にたいして、当時、劉少奇の総書記選出に公然と反対していた高崗を支持するようにはまず仕向けた。第二の目的は、「東北の党・政・軍の全権力を高崗から羅榮桓に引き渡すこと」であり、毛沢東は、高崗の劉少奇反対は党中央への反逆だとして高崗に一撃を浴びせ、ついに高崗を「殺害」したが、高崗排除の真の理由は、高崗が「毛沢東の基本方針にさからって、ソ連との合作政策を本気で実行した」からであった。そして第三の目的は、饒漱石、潘漢年ら、一九四〇年代に毛沢東が行なった「日本および汪精衛との同盟による蒋介石への対抗」という民族的裏切り路線(王明によれば、毛沢東は新四軍総政治部主任・饒漱石にたいし、反蒋介石の合作について、日本および汪精

衛の代表者と交渉するため饒漱石の名で代表者を派遣し、同時に日本軍および汪精衛にたいする軍事行動を停止するよう秘密指令を發した、という)の生証人をすべて消してしまふことであった、という(Ban Muu, *Ilonisa Kiti i Iperariscro Mao Lia-rya*, *crp.* 196. 邦訳、前掲書、二二四―二二五ページ)。

(16) 唐士洋三「党の現勢(中華人民共和国の政治——中国共産党)」、アジア政経学会編『中国政治経済綜覧——昭和三十五年度版——』一橋書房、一九六〇年、一一三ページ。

(17) John Gittings, *The Role of the Chinese Army*, New York, Oxford University Press, p. 276. 邦訳、前田寿夫訳『中共軍の役割』(八下)、時事通信社、一九六九年、一九一ページ。

(18) なお、中国共産党の党内闘争にしばしば大きな意味をもつ軍の役割を、ここでは検討していないが、先にみた陳毅報告が高崗の第一の罪状として「以軍制党」を指摘しているに、わらず、「結局、軍隊は『高崗』事件にかんしては重要な(もしくは識別可能な)役割を演じなかった」(Gittings, *ibid.*, p. 279. 邦訳、同右、一九五ページ)と考えてよいだろう。この点について田豈は、「共産党権力の来源は、まさに高崗自身が述べているように、一般には軍隊がつくったもの」である。だが彼には軍隊がなかった。林彪が部隊を率いて入関したとき、東北に残っていたのは、彼自身の吉黑軍区の部隊だけであり、その軍区部隊は地方的な性格の部隊であった(田豈、前掲論文)と述べている。

## 五 権力の地方化と高崗

中国革命は、周知のように、「農村」から「都市」を包囲する根拠地革命によって地方権力を樹立し、やがて中央権力をうちたて

てゆくという過程をたどった。このような革命の歴史的経緯は、中央政權樹立後も、全国を大行政区に分割して統治するという体制を形成せしめることとなった。<sup>(1)</sup>このような状況のなかで、高崗は、はじめは陝西を地盤とし、建国後は東北を地盤として出現した代表的な土着政治家ないしは地方実力者であった。この点に注目した唐土洋三氏は、「彼を最大の地方実力者たらしめた主たる要因は、東北の軍事的・政治的・経済的立地条件にあったといえよう。東北は第二次大戦末期にソ連軍に占領され、ソ連の直接援護下に革命と建設を推進し得た。さらに朝鮮戦争中は前線における中共軍の直接的な補給基地となった。また東北は元来中国重工業の最大基地であった」と簡潔に述べている。また香港の分析家・許俊は、東北の特殊性を次の三点に要約している。(一)解放が比較的早い地域であったため土地改革と工業建設の面で、全体として先進的な地位にたっていた。(二)ソ連と隣接し、しかも中国長春鉄道と旅順、大連の関係で、ソ連とはおのずからさらに緊密な関係にあった。(三)工業が比較的発達し、経済上一区域となりうるので、とくに中央をたよる必要がなく、しかも中央の経済力をささえていた。<sup>(2)</sup>そして、このような事情から東北は必然的に別格的な地位にあり、特別な扱いを受けていたのであるが、「高崗が東北の軍政を指導するようになってから、『独立王国』の形態がはっきり現われ始めた」<sup>(3)</sup>ようである。

こうした状況のなかで高崗は、公式な罪状によると、「一九四九年以来、……陰謀活動を進めてきた」といわれている。だが、

はやくも一九四八年三月、すでに東北の指導者になっていた高崗は、内モンゴル幹部会議での講話で、「高崗式の国際主義」(田岯)を鼓吹し、内モンゴルが外モンゴルとともにソ連の側にも向くべきことを主張したばかりか、建国直前の翌四九年七月には、「中国東北人民政府代表」という資格で、独自の通商使節団をみずから引率してモスクワを訪れ、東北のみに適用される「東北とソ連とのあいだの相互商品交換協定」(新華社一九四九年八月一日瀋陽電)<sup>(7)</sup>をスターリンとのあいだで中共中央とは無関係に締結したのであった。<sup>(8)</sup>

このような独自性を示していた高崗は、四九年九月八日、東北幹部会議で「榮譽は誰に属するものか」と題する講演を行ない、「東北全党と全人民の中心任務は経済建設であり、他のすべての工作は経済建設をうまくやるために奉仕するものである」と述べ、党内の一部の幹部は過去の榮譽にばかりしがみついているという挑発的な意見を表明したのちに、「東北を全国の工業基地に建設すること、これこそわれわれの偉大で光栄ある任務である」と強調したのである。<sup>(9)</sup>

このように高崗指導下の東北の建設が着々と進み、「ソ連から専門家を招聘したり、ソ連へ留学生を派遣したりすることはすべて事後に中央に迫って追認させ、ソ連から輸入するかなりの機械商品、その見返りに東北からソ連へ輸出する大豆などはすべて東北人民政府が直接ソ連と貿易協定を結んだものであり、中央の対外貿易部でさえまったく知らない」という状況が一時存在したよ

うである。こうして、すでにまっしぐらに「独立王国」の強化に向かいつつあるなかで、四九年一〇月、中華人民共和国の樹立を迎えたのであるが、建国後、毛沢東がみずから代表団長となって訪ソし、スターリンとの係争の末とはいえ、五〇年二月に中ソ友好同盟相互援助条約が締結されたことは、高崗にとって最初の打撃であった。周知のように、この中ソ友好同盟条約の締結により、中ソの一枚岩的団結がしきりに強調され、中国の側でもソ連讚美のキャンペーンがさらに進められたことは、スターリンの高崗への支持が、公開のものから秘密のものへと転化<sup>14</sup>せざるをえなくなつたことによつて、高崗には状況はしだいに有利ではなくなりつつあつた。このような状況のなかで五〇年六月、朝鮮戦争が勃発したのである。この抗美援朝戦争は東北を基地として遂行され、東北はその直接の後方となつた。そのことは、高崗の独立自主の風潮をさらに促進し、国营企業にたいしても高崗が統一的な指導を行なうようになつたのであつた。<sup>15</sup>このような状況に対処するため、毛沢東は、はやくも一九五〇年末、第一に、その腹心の部隊を大量に東北へ導入し、「一面で『援朝』の基地とし、他面では高崗の軍勢力への圧迫作用を起した<sup>16</sup>」ともいわれている。

第二には、党の問題として、東北の党の組織と財政面を従来から主管していた党政治局委員の陳雲、東北人民政府第一副主席の李富春、李富春と関係の深い林楓・同副主席らの幹部を通じ、きわめて強固な高崗の人的・組織的基盤をゆるがし、高崗を東北の党・軍・政の三方面から浮かせようとしたのであつた。<sup>17</sup>

第三には、高崗の力が北朝鮮との諸関係にまで及ばぬように、林彪の第四野戦軍の系統を用いて高崗を抑え、一九五二年下半期には、吉林军区司令員として高崗と関係の深かつた倪志亮・駐北朝鮮中国大使が突然失踪するにいたつたのであつた。<sup>18</sup>

一九五二年になると毛沢東は、中国本土と共通ではなかつた「東北幣」を廃して人民幣で統一し、八月には地方の行政を統一するというスローガンのもとに「東北人民政府」を廃止し、同年一月には六大行政区も廃止されたが、これらの措置は、おもに高崗らの東北を対象にしたものであつたと思われる。こうして東北の「独立王国」は重大な転機を迎え、高崗は右の決定をみた中央人民政府委員会第一九次会议で、中央人民政府国家計画委員会主任に任命されたのである。許冠三も指摘するように、この人事が「高崗を彼の『独立王国』から引き離すためであつた<sup>19</sup>」ことは明らかであろうが、こうして高崗が中央政府の国家計画委員会主任に任命されたことによつて事件は新しい段階へとはいり、その舞台の中心は瀋陽から北京へと移つていつたのである。<sup>20</sup>

(1) 一九四九年二月一六日付「大行政区人民政府委員会組織通則」(『人民日報』一九四九年二月一九日)によつて全国が六つの大行政区に分割された。

(2) 唐土洋三、前掲論文。

(3) 許俊「高崗事件研究」、前掲『中共高、饒事件面面觀』所収。

(4) 金雄白、前掲書、二四ページ。

(5) 前掲「關於高崗、饒漱石反黨聯盟的決議」。

(6) 二の注(16)、参照。

(7) 許俊、前掲論文による。

(8) この貿易協定は一年の協定で、ソ連の最初の公開の援助を意味し、ソ連は工業設備、自動車、石油、綿製品、紙類、医療器材、薬品などを東北人民政府に供給することになったが、この協定は公式には発表されず、この協定についての『東北日報』社説が四九年八月九日付『人民日報』に転載されたにすぎない(『東北日報』社説「對中國人民的真正友誼—慶祝東北與蘇聯一年貿易協定」。ソ連側は七月三一日付『イズベスチヤ』が協定内容を報道した(“К Борю о Торговле Маньчжурия с СССР”, «Известия», 31, VII, 1947. 邦訳「東北とソ連との間の貿易協定締結に関する報道」前掲『新中国資料集成』第二巻所収)。なお、その後の毛沢東・スターリン会談の結果、中ソ両国間に正式な貿易協定(一九五〇年四月一九日調印)ができてからは、スターリンが単独に東北を援助する従来の方針は改められ、「先に高崗と協定調印した援助計画の各項目を中共に対する援助の総項目中に編入した」(外務省アジア局中国課「中・ソ関係の発展八一九四九—一九五八年V」、一九五八年八月)という。

(9) 高崗「榮譽是屬於誰的?—一九四九年九月八日在東北幹部會議上的講演」、『學習』第一輯、香港大公報社出版、所収。なお、先の向徳の手記によると、陳毅は高崗のこの講話をとりあげて激しく批判している(向徳、前掲『高饒反黨同盟』真相)。

(10) 向徳、同右論文による陳毅の報告。

(11) 「高崗同志在東北局城市工作會議上的總結」、『東北日報』一九五一年六月二五日、参照(許俊、前掲論文)。

(12) 田登、前掲論文。

(13) 高崗は東北に張明遠らの側近を「四大天王」として配置し、強固な人的・組織的基盤を形成していたといわれている(向徳、前掲『高饒反黨同盟』真相)、ほか参照)。鄭竹園はこの点にかんし、こう述べている。「一九四九年東北人民政府成立当時、主席は高崗、

副主席は李富春、林楓、高崇民の三人で、張秀山・張明遠・陳伯村の三人は東北人民監察委員会の正・副主任にすぎなかった。一九五一年一月二十三日、東北人民政府委員会が東北行政委員会に改組後、高崗の措置で、張明遠は東北行政委員会副主席兼秘書長に昇進、同時に中共東北局第三書記に就任し、東北の実力者の一人にのし上った。また趙德尊は中共東北局農村工作部長兼黑龍江人民政府主席に、陳伯村は東北行政委員会人事部長に、郭峰は遼寧省党委書記に昇進、全東北の党、政の実権は高崗派の手のうちにはいった。高崗が東北を根拠地として、党内第二の領袖の地位をかちとる意図であったことがはっきりみてとれる」(鄭竹園『大陸局勢与中共前途』、香港、自由出版社、一九五九年。邦訳、江南香訳『中国共産党の十年』、日本外政学会、一九五九年、三七ページ)。

(14) 田登、前掲論文。

(15) 同右。

(16) 一九五二年一月一日付「中央人民政府關於改變大行政区人民政府(軍政委員會)機構與任務的決定」(『人民日報』一九五二年一月一七日)。

(17) 許冠三、前掲論文(△下)。

(18) 高崗の北京移動については、「高崗は新しい任地の北京に赴くことを承知しなかった。だが一九五三年スターリンが他界したので……高崗は後楯を失い、ついに一九五三年七月北京に赴いて国家計画委員会主席の職務についた」(金雄白、前掲書、二四ページ)との見方が注目されよう。

## 六 ソ連にとつての東北

前節でみたように、高崗にとって東北は、彼の政治的成長の地

盤であり、資産であった。このような東北を中国の工業基地、經濟建設センターにしようとする高崗の意欲はなみなみならぬものであり、以後このような主張は、ソ連の援助による重工業中心の第一次五カ年計画の重点基地こそ東北であるべきだという認識となつて、高崗ら東北の指導者によつてしばしば表明された。

一方、東北のこのような特殊な位置が高崗の政治的存在を巨大なものにしたのであつた。こうして、東北において、党、政、軍、民の全権を手中にした高崗にたいし、「瀋陽の大衆集會では、『高崗萬歳』のスローガンが出現したが、もはやそれは奇異ではなかつた<sup>(2)</sup>」のである。このような高崗の突出した存在が、毛沢東ら党中央にとつて容易ならぬ脅威であつたのは、その舞台が中国の國家建設の根拠地でもある東北であつたからであるが、さらに、こうした東北特殊化狀況のなかに存在する高崗が、明らかにスターリンの支持を得ていたからであつた。

ところで、隣接地域へのスターリンのソ連の対外接触、対外進出の方法は、一般に東欧諸國にたいしてみられたように、まず第一に軍事占領、第二には現政權を利用しつつその權威を奪うこと、第三には内戦や局地戦を利用しつつ相手國共產黨を支援するという戰略・戦術をとつてきたといえるが、この相手國共產黨への支援という点では、土着の共產主義勢力が増強されることを欲せず、東欧の例にもみられるように、しばしば「モスコヴィッチ」(ソ連仕込みの親ソ派のリーダー)を送り込んだのであつた。そして、「スターリンは、中国の東北においても同様の政策をとつたよう

である。ここでは『モスコヴィッチ』として送り込まれた主要人物は、李立三と周保中であつた<sup>(4)</sup>といわれている。そして、いわゆる「李立三路線」で知られる李立三は、一五年間のモスクワ滞在のち一九四六年初頭に突如ハルビンにあらわれたが、それは「北滿に共產政權を樹立する」ためであつたとの推測も存在する<sup>(5)</sup>。東北抗日ゲリラの指導者として知られた周保中は、シベリアへ逃れたのち、ソ連軍による東北解放とともに復歸し、吉林省人民政府主席となつた。これらの「モスコヴィッチ」の存在を経て高崗の政治的台頭があつたことにわれわれは注目せざるをえない。

もともと東北については、スターリン自身が「私は中共軍の東北進駐に同意しなかつた」と語つたといわれている<sup>(6)</sup>。そして、一九四五年の中ソ友好同盟条約で、ソ連は蔣介石政府の「弱身」を利用して、中国長春鉄道、旅順口、大連港など、帝政ロシアが東北にもつていた權益を回復したのだが、日本降伏直後のソ連の対東北政策は、ほぼ、(一)スターリンがポツダムとヤルタの両會談でソ連に割り当てられた地域の軍事占領、(二)滿州の産業設備と機械類をできるだけ多く押収してソ連に移す、(三)日本人戦争捕虜をすべて安価な労働力としてソ連に移す、というものであつた<sup>(7)</sup>。

この点について台湾の研究者・鍾燾は、「一九四六年、中国政府が理を説き情を説いて東北の主權問題を守るため、モスクワでソ連と交渉を行なつていたとき、ソ連軍は東北で強盜式の略奪を開始し、数カ月の間に、中国が絶対的主權をもつ東北の各工業設備と大型機械、動力設備を略奪し運び去つた」と述べている。周知

のように、日本敗戦後の満州におけるソ連側のこのような行動については、日本人自身が多数その目撃者になっているのだが、鍾燾はさらに、「奪い去られた工業設備や機械は一九四六年六月に満州へ到着したアメリカ『賠償委員会』へ Edwin W. Pauley の率いた米国経済調査団のこと——引用者Vの計算によれば八億五八〇〇万米ドル以上に達し、消耗および補充などの費用を含む損失は、二十億米ドルに達している」と指摘している。一方、このような見方とは対照的に、最近のソ連の論調は、「事実、ソヴェト軍の当局者によって若干のかつての日本の軍需工場の施設の一部が取り外されているが、これは中国の内戦への米国の武力干渉の条件下においては、これらの工場が中国の人民民主主義軍にたいする戦争目的に利用される可能性があったからである。取り外された施設がもっていた価値はたいしたものではなかった」と述べているけれども、これはやはり苦しい弁明でしかないであろう。

ともかくソ連は、四五年の中ソ友好同盟条約に基づいて蒋介石政権と折衝しつつ、他方では中国共産党がソ連占領中の満州にはいることを助け、北満のハルビン、チチハル、吉林や、やがて長春を中国共産党に占拠させることとなったのであった。もとより、中ソ両共産党の密接な接触のもとにこうした行動が展開されたとはいいがたく、たとえば、当時の状況について、ジャック・ベルデンは、「まったく奇妙なことだが、ロシア人はこのとき中共ではなく、蒋介石を助けていたのである。義勇軍および林彪將軍の部隊が、地方を引きついでいた時期に、ロシアの赤軍は、蔣の將

校たちを満州の各都市に着任させ、長いあいだ彼等を保護した」とさえ記述している。それだけに、毛沢東にとって東北を固めることがぜひとも必要であった。毛沢東が東北根拠地の建設をいかに重視していたかについては、一九四五年一月の彼自身の演説「強固な東北根拠地を築こう」<sup>(12)</sup>がそれを端的に示している。このような経緯のうちに一九四八年以降、高崗の指導下に東北建設が進められてきたのであるが、やがて四九年一〇月の中華人民共和國の成立は、毛沢東訪ソによる中ソ会談と新しい中ソ友好同盟条約および中ソ間の諸協定を成立させ、ソ連の東北における利権には大きな制約が課せられていった。中ソ協定の一つはこう表明している。「ソ連政府と中国政府は、一九四五年以来、極東の情勢に根本的变化が生じたことを確認する。……ソ連政府と中国政府は、この新しい情勢が中国長春鉄道、旅順口、大連港の問題への新たな処理の可能性を提供するものであることを認めた。」

一九五〇年初頭の毛沢東訪ソによる中ソ会談は、中ソ両国が必要とした歴史的な首脳会談であり、スターリンと毛沢東の長期のコミュニケーション・ギャップを埋めるためのものであったが、同時に田豈が指摘するように、それ以外にも高崗らの東北特殊化問題についてスターリンと協議することが毛沢東にとって重要な目的であったろうこともいえない。すでにわれわれが別の機会に詳しく言及したように、スターリンと毛沢東の中ソ会談は、中国にとっての一定の成果と毛沢東にとっては根深い対スターリン不信感を残したが、このような結果であっただけになお高崗の存

在は許せないものになってゆく。高岡を「国際主義者」とみる今日のソ連の立場からすれば、「中国がソ連の援助を受けて経済的混乱から立ち直り、国際的地位が強化されるや、ソ連との大規模な協力は中国内の国際主義的傾向を急速に増大させ、毛派の党、政府内での影響力を奪いかねないと、毛沢東は考えるようになった」とみなされるのである。こうして高岡は、スターリンの死という状況変化の直後に摘発されてゆくのである。

- (1) 高岡が一九四九年九月八日に東北幹部会議で行なった前掲の演説「荣誉は誰に属するものか」(『學習』第一輯所収)は、そのことをよく示している。
- (2) 余逸楽「東北人説高岡」、『明報月刊』一九六六年二月号。
- (3) こうしたソ連の政策については、J. M. Mackintosh, *Strategy and Tactics of Soviet Foreign Policy*, London, Oxford University Press, 1962, pp. 33—41. 邦訳「鹿島守之助『ソ連外交政策の戦略と戦術』」鹿島研究所出版会、一九六四年、四二—五一ページ、参照。
- (4) 『中華人民共和国の成立をめぐる中ソ関係——中ソ同盟とその動態——』ハタイブ印刷、一九七〇年六月、二七ページ。
- (5) 同右、二七—二八ページ。
- (6) 蔣中正『蘇俄在中國——中國與俄共三十年經歷紀要——』台北、中央文物供應社、一九五六年、一五四—一五〇ページ。邦訳、寺島正訳『中国のなかのソ連』、時事通信社、一九六二年、一五〇—一五三ページ。
- (7) Mackintosh, *op. cit.*, pp. 35—36. 邦訳、前掲書、四四—四六ページ。
- (8) 鐘蕪「中蘇共闘争和中俄兩個國家、兩個民族間的鬥争」。邦訳「中ソ両共産党の闘争と中ソ兩國、両民族間の闘争」、『問題と研究』一九七四年新年号。
- (9) 同右。

(10) オ・ベ・ポリツフ、前掲論文。

(11) Jack Belden, *China Shakes the World*, New York, Harpers & Bros., 1949. 邦訳「安藤次郎・陸井三郎・前芝誠一共訳『中国は世界をゆるがす』」(以下)、青木文庫、一九六五年、九八—一〇〇ページ。

(12) 「建立鞏固の東北根拠地」(一九四五年二月二十八日)、『毛澤東選集』第四卷、北京、人民出版社、一九六〇年、所収。邦訳、三一書房版、第八卷、所収。

(13) 「關於中國長春鐵路、旅順口及大連的協定」(一九五〇年二月十四日)、『人民日報』一九五〇年二月十五日。

(14) 田岯、前掲論文。

(15) 中嶋嶺雄、前掲報告、参照。

(16) ウェ・イ・グルーニン、前掲「高岡・饒漱石事件の真相」。

## 七 スターリンと高岡——結論にかえて——

これまでの検討において、高岡事件の国際的背景、つまりスターリンとの関係については、ほぼその輪郭を描くことができた。いうまでもなくスターリンと高岡との関係については、これまでも一般的に推測されてきてはいた。その代表例として、中ソ関係に詳しく、現地に状況をたずねてみいるクラウス・メーネルトの推測をあげるなら、彼は高岡事件とスターリンとの関係について、その著『北京・モスクワ』のなかでこう述べている。

「私は中国での話し相手にこの事件の背景についてどう思っているかといく度も尋ねた。だれも正確なことは知らなかったが、二、三の例外を除いて彼らは高岡ががむしやりに独立を求めながら省長に許されている以上に緊密にスターリンと協力し



たのではないかと思うと語った。私自身、正確な資料がないので判断は避けたいが、毛沢東が中国全土に勝利を収めた時に、スターリンが満州到北京から若干独立した国家が生まれるよう助長し、かつこれがかつて満州国に属していた外モンゴルのようにモスクワの衛星国にしようとしたのだとすれば、理解できなくもないであろう。<sup>(1)</sup>

この周到な記述のなから、高岡事件については、中国国内でもスターリンとの関係がほぼ暗黙のうちに知られていたことが推察できよう。もとより、クラウス・メーネルトが六〇年代初頭に試みた推測は、今日、さらに数多くの状況証拠や未公開資料によって裏づけられるようになったが、高岡事件とスターリンとの関係は、はやくからかなり一般的に推測されていたのであり、また、中国共産党の公式文献のなかに、それをにおわせるような記述もあったのである。たとえば、一九五六年の「スターリン批判」に関連して中国共産党が発表した有名な論文「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」は、「一九五三年にはまた高岡、饒漱石の反党連盟がわが党内にあらわれた。この反党連盟は、国内および国外の反動勢力を代表し、革命事業に危害を加えることを目的としていた」<sup>(2)</sup>（傍点——引用者）と述べている。この記述は高岡事件がたんに内政上の問題ではなく、国際的関連を有したものであることを示唆しているが、東北を舞台としたこの事件で「国外」とは何を意味するのであろうか。右の論文が発表された時点で中国共産党は、「抗日戦争の時期にはまた、王明同志を代

表者とする右翼 和見主義の誤った路線がわが党内にあらわれた<sup>(3)</sup>」と述べて、当時はまだ「王明同志」という表現を用いていたが、一貫して「親ソ派」の領袖であった王明は、一九七四年三月モスクワで客死している。われわれは、その王明が要人墓地として知られるモスクワのノヴォデヴィチ修道院墓地に手厚く、しかも巨大な胸像とともに葬られている現場に立ったとき、中ソ関係史と中国共産党の党内闘争史との微妙な相関関係を思わず再認識せざるをえなかったが、高岡事件は、もしもそれが目的を成就していれば、きわめて重大な諸結果をもたらしたのであろうし、また、そのような歴史的可能性にもっとも肉迫した事件であったといえよう。先の「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」論文が、高岡事件につき、「もしも党中央委員会がいちはやくこれを発見して、時を移さずこの反党連盟を打ち破らなかつたならば、党と革命の事業のこうむる損失は、計りしれないものがあつたであろう<sup>(4)</sup>」と述べ、毛沢東自身も同じ時期に、「そうでなければ、高岡をもう一年のさばらせることになり、それは想像することもできないおそるべきことであつた」と語っている。その「計りしれない損失」や「想像することもできないおそるべきこと」こそ、スターリンと結んだ高岡が東北に「親ソ政権」を樹立するのみならず、それを拠点に党中央の権力を奪取しようとしたことではなかつたか。スターリンの企図と行動のパターンからして、このような高岡の「陰謀」を支援したであろうことは推測にかたくない。それだけに、毛沢東と中国共産党中央にとっては、高岡事件の摘

発が急がれたのであろうが、それをソ連側の視点からみれば、ソ連との協力関係の強化による中国の経済的・国際的地位の強化が、中国国内の「国際主義者」、つまり「親ソ派」を急速に増大させ、毛沢東の権力を奪いかねないと考えようになつたとみなされるゆえんであろう。<sup>(7)</sup>

現にソ連側は、この点にかんし最近、次のような決定的な告白を行なっている。「一九四五—一九四九年に、満州を含めて全国的規模での中国共産党の政治的目標の設定と社会・経済的施策の遂行において重要な意義をもっていたのは、初めは延安において、あとでは満州とモスクワにおいて実現された中国共産党とソ連邦共産党間の直接的接触であつた。これらの目的のためにソ連邦共産党中央委員会は中国共産党の重要人物数名をモスクワに招聘した。すべての原則的問題にかんし、手紙のやりとりと個人的接触によつてソ連邦共産党中央委員会と中国共産党中央委員会とのあいだにレギュラーな意見交換がおこなわれた」(傍点——原著者、傍線——引用者)。<sup>(8)</sup>

ところで、先の王明ら「親ソ派」幹部の消息が途絶えたのは高崗事件以降であるといわれており、田豈はこの点を、「高崗、饒漱石の失脚と同時に、陳紹禹、王明の本名——引用者Vおよび李立三の消息も途絶えた。これは必ずや高崗・饒漱石事件と関連をもつことである」と推測している。<sup>(9)</sup>

さらに、今日の中国の公式見解では、すでにみたように、高崗事件には、のちに「三面紅旗」政策や「スターリン批判」以降の

中ソ論争との関連で毛沢東らと対立し、「修正主義者」、「フルシチョフ主義者」として失脚していった彭徳懷らが連繫していたこととされているが、高崗事件が彭徳懷事件と結びつけて論じられていることそれ自体が、高崗事件とソ連との関係の存在を示唆しているといえよう。なお、この点で、フルシチョフが一九六〇年六月のブカレスト会議で、「高崗は、中国共産党の誤つた対ソ政策に反対したという、ただそれだけのことで罪を得たのだ」と語つたというエピソードは意味深い。<sup>(10)</sup>

これまでの検討で明らかのように、高崗事件は、きわめて深刻かつ重大な国際的背景を有していたのであるが、この点でさらに検討を加えねばならない問題は、朝鮮労働党内部における「親ソ派」肅清事件との関連であろう。一部にはすでに知られているように、一九五三年八月、朝鮮労働党内部では、南労働の指導者として、また土着派共産主義者として知られた朴憲永らが肅清され、同時に「親ソ派」ないしは「モスコヴィッチ」の許嘉誼らも肅清された。<sup>(11)</sup> われわれがすでに検討したように、スターリンのアジア戦略との関連をも有して勃発した朝鮮戦争は一九五三年三月のスターリンの死後、同年六月によく停戦にいたつたのであり、まさにスターリンの死のちに、北朝鮮内部で許嘉誼、朴憲永らの肅清事件があり、中国ではやがて高崗事件の摘発へと進んでゆくこの相関関係を無視することはできないであろう。田豈は、朴憲永、李承燁、許嘉誼らの肅清事件とスターリンの死、高崗事件との関連を指摘したのち、高崗事件は、陳紹禹(王明)、李立三、

倪志亮らの「親ソ派」幹部とも関連があったとし、彼らの名前が高岡事件で表面にだされなかったのは、国際関係に及ぶ重大な影響への配慮、つまり「第一にソ連を刺激することを避け、第二には、中共とソ連とのあいだの各種の角逐が暴露されるのを避けるためであった」<sup>(13)</sup>と推測している。アジアの冷戦下であって、中国の一枚岩の団結と社会主義陣営の強化が叫ばれていた当時の国際環境のなかでは、いわば当然の帰結であったといえよう。

以上のような状況と、当時のスターリンの絶対的權威および中国両国間の当時の力関係を顧みるならば、高岡事件の摘発がスターリンの死をまっけてはじめて可能であった事情を、われわれは十分に理解することができる。高岡とスターリンとの結びつきが強かったからであろうか、スターリンの危篤に際しては、毛沢東は高岡を伴って在北京ソ連大使館を見舞いに訪れ、スターリン死後北京で行なわれた「スターリン追悼会主席団」の名簿では、高岡は劉少奇よりもさきに第三位に名前を連ねていたのである<sup>(14)</sup>。

だが、その高岡にたいして毛沢東は五三年一月二十四日、ペリアがソ連の最高法院で正式に断罪されたその同じ日に、党中央政治局会議で警告を発し、すでにみたように、「党の団結強化にかんする決議」のための「提案」を行なったのであった。こうして高岡摘発の火切ぶたが切られてゆくのである。

では、そのように高岡と関係の深かったスターリンは、どの程度まで本格的に高岡らを支援したのであるうか。

毛沢東は、スターリンと高岡との個人的関係について、いちど

だけ言及して、「スターリンは高岡を大変ほめあげて、わざわざ車を一台贈った」<sup>(15)</sup>と述べているが、中国革命の勝利者としての毛沢東をモスクワに迎えたとき、スターリンには、毛沢東を前にしてやはり迷いがあったのであろう。当時、東北にいた一中国人は、東北で高岡がどのような評判であったかを綴った文章のなかで、事がうまく運ばなかった際にたいするスターリンの日和見的な態度を示唆したのち、「もしもスターリンがもっと果断であれば、高岡はとくに『東北王』に成ったであろう」と語っている。このようなスターリンの態度を裏づけるかのような証言がフルシチョフの回想であろう。フルシチョフは、駐中国大使であり、情報将校でもあったパニューシキンが高岡と接触していたときの報告を、モスクワを訪れた毛沢東にスターリンが示したとして、「スターリンは毛の信頼と友情を得ることを決意、このため彼はパニューシキンと高岡との会談についての報告を取り上げ、それを毛に手渡して言った、『ごらんさい、これを読んだら興味を感じるかもしれません』<sup>(17)</sup>と回想している。

もしも、この事実が正しいとするならば、スターリンの意図がどんなものであったのか、さまざまな推測が可能であろうし、フルシチョフ自身はこの点を次のように推測している。「なぜスターリンは高岡を裏切ったか？ それは彼独得の邪推深さによるものと私は思う。……彼の計算によれば、早晚、毛は高岡が彼に情報を提供していることを自分で知るであろうし——もしもそうな

れば、毛はスターリンを中共政府への妨害を挑発したとしてその責任を問うてくるだろうというのであった。そこでスターリンは高岡を犠牲に上げ、それによって毛の信頼を勝ち取るのが賢明だと考えたのである。しかし、私は毛は決してスターリンを信用していなかったと思<sup>(8)</sup>う。このとおりであるのなら、当時のスターリンの行動はいかにもスターリンらしい選択であったともいえず。ともあれ、毛沢東にとって幸いなことに、スターリンは一九五三年三月に死んだのであった。同時に、このスターリンの死こそ、高岡らの末路を決定づけることになったことは疑いない。

以上のように高岡事件は、中ソ関係史と中ソ対立の歴史的過程のなかに深く刻み込まれた重大な歴史的事件であったのである。

- (1) Klaus Mehnert, *Peking und Moskau* (Guttag, Deutsche Verlags-Anstalt, 1962, S. 319—320. 邦訳「部分訳」、河原田健雄訳「北京・モスクワ」、時事通信社、一九六四年、三四ページ。
- (2) 「关于無産階級專政的歴史經驗」、『人民日報』一九五六年四月五日。邦訳、日本共産党中央委員会宣伝教育部訳編『プロレタリアート独裁の歴史的經驗について』、新日本出版社、一九五七年、一八ページ。
- (3) 同右。邦訳、同右、一七ページ。
- (4) 中嶋嶺雄「モスクワ・ウランバートル・北京」、『中央公論』一九七五年三月号、参照。
- (5) 前掲「关于無産階級專政的歴史經驗」。邦訳、前掲書、一八ページ。
- (6) 前掲「在中央政治局擴大會議上的講話」。邦訳、前掲書、六一

ページ。

- (7) ウェ・イ・グルーニン、前掲「高岡・饒漱石事件の真相」、参照。
  - (8) オ・ペ・ボリソフ、前掲論文。
  - (9) 田豊、前掲論文。
  - (10) David A. Charles, "The Dismissal of Marshal Peng Teh-huai", *The China Quarterly*, Oct.-Dec. 1961.
  - (11) これら北朝鮮内部の肅清事件については、やはりあたり See Robert A. Scalapino and Chong-Sik Lee, *Communism in Korea*, Berkeley, University of California Press, 1972, p. 404, p. 509.
  - (12) 中嶋嶺雄、前掲「朝鮮戦争と中国」。
  - (13) 田豊、前掲論文。
  - (14) 許冠三、前掲論文へ上、参照。
  - (15) 前掲「在成都會議上的講話」。邦訳、前掲書、二二二ページ。
  - (16) 余逸棠、前掲論文。
  - (17) Storobe Talbot, *Khrushchev Remembers: The Last Testament*, op. cit., p. 243. 邦訳、前掲書、二五五ページ。
  - (18) *Ibid.*, 245. 邦訳、同右、二五六ページ。
- 〔追記〕 本稿の作成は、筆者にとってはほぼ十年來の懸であつたが、本稿を完成するに際しては、昭和四八—五〇年度文部省科学研究費特定研究(1)「國際環境に関する基礎的研究」プロジェクトからの助成を得た。なお昭和五一年五月に東京外國語大学で開催されたアジア政経学会関東部会では本稿の要旨を報告した。その際、高岡事件と中ソ関係の相関性について否定的な立場からこの事件を分析された徳田教之氏(アジア経済研究所主任研究員)からは、デタカ ッサントとしての有益な批評をいただいた(なお、同氏の論稿「一九五四年における高岡・饒漱石肅清の政治力学」(徳田教之、辻村明編『中ソ社会主義の政治動態』、アジア経済研究所、一九七四年、所収)、参照)。(なかじま・みねお 東京外國語大学)